

現地を訪問して想うこと

島田 章範（1967・経済）

この東北応援ツアーに参加して感じることを記します。

1. 立命館としてもっと貢献できることは…

近年、本学の発展をOBとして大変嬉しく思っています。

キャンパス、学部、学科の拡充が進むなかで、立命館として災害の予告、予防、安全な街づくり、復興、そしてその人材育成等々あらゆる災害に対応する学術的で大系だった研究開発部署を新設することが出来ないものか、と思います。

立命館から予知、予防、復興等々に対して先進的な施策が発信できないものか…このような分野は、現状では国公立系の機関、大学等にゆだねられているクライがありますが、先進で斬新な施策を発信し、世の中に更に貢献できないものかと考えます。

2. 今回参加した動機

淡路島に生まれ、高校卒業まで島で育ちました。

阪神淡路大震災時は、宝塚（阪神地区の一部です）に住み、今も宝塚在住です。

淡路島の実家もやられ、宝塚の家は半壊状態でした。保険会社への申請では、私は半壊と思うのにその認定を得られず、保険会社と被災者のGAPの理不尽を感じた次第です。

一応、被災者であったところから、東日本大震災を…との思いで今回応募いたしました。

3. 何という光景か

私は宝塚で揺れしか（もちろん火災もありましたが）経験しなかったが、東日本大震災では、大津波、さらに加えて福島（原発）があります。とても比較にならないと思うのですが…(株)ささ圭の佐々木社長、奥様の靖子様のお話で人の心の宥^{ありよう}様が良く良く理解できます。

3-1 『今回「女川」を初めて訪ねた。何故か被災者が他の被災地を訪ねられないのです。』

3-2 お寺の御堂がポツリと残っている。そして頑張って何かを主張するように御堂がたっている。

『このお堂は、義父がお寺の総代として、5年前に建立したものでした。』

3-3 『「白砂青松」の景観だったのです。』

なんと美しい景観だったのでしょうか、眼を閉じて、しっかり瞼に思いうかべました。

3-4 バスを名取川沿いの工場、自宅跡の近くに止められてのご説明には、何とも心をしめつけられる緊迫感、そして臨場感を感じました。

『この地に工場と、自宅があったのです。』

3-5 ささ圭の主力商品「希望」について

『負けてしまうと全てを失う。－立命 Spirits、希望をもって復興を目指す。そして「希望」を主力商品化…』

等々

4. この企画について

この企画に参加して、立命 OB として更に心強く感じました。校友会がこのような企画を立案、実行されることに誇りを感じます。いろんなところに素晴らしい心くぼりも感じました。

————— 感謝 —————

以上